

夏休みおすすめ図書 ～小学校3・4年生向け～

「フラガールと犬のチョコ 東日本大震災で被災した犬の物語」

祓川（はらいがわ） 学 // 作 かなき 詩織 // 絵 ハート出版 645ハ

原発事故で緊急避難させられた福島町。置き去りにされた動物たちの中に、“フラガール”の愛犬・チョコもいたのです…。多くの人たちを悲しみのうず巻き込んだ東日本大震災を通じて、人間と動物の“きずな”を描いたお話。

「海をわたったヒロシマの人形」

指田 和 // 文 牧野 鈴子 // 絵 文研出版 Eマ

広島市の平和祈念資料館を訪れた筆者は、展示している真っ赤な着物を着た人形に目を留めます。この人形は、終戦後アメリカ兵が広島市内で拾い、帰国後に知人女性に贈られ60年間大切に保管された事実を知り、実際に筆者が人形を保管していた女性に会いに行く実話を描いた話です。

「だいすきだよ、オルヤンおじいちゃん」

カミラ・ボルイストレム // 作 石井 登志子 // 訳 徳間書店 949ボ

8才のオルヤンは、おばあちゃんがいる老人ホームで自分と同じ名まえのおじいちゃんとお会う。足がわるくて外に出られないおじいちゃんを、オルヤンは車いすに乗せて連れ出すが…。男の子とおじいちゃんの交流と別れを描く。

「みさき食堂へようこそ」

香坂 直 // 作 北沢 平祐 // 絵 講談社 913コ

あなたが食べたかったあの料理、作ります！みさき食堂は、ちょっとふしぎな食堂です。食べたいものがあるけど、わけがあって食べられない人が、ときどきやってきて…。心がやわらかくなる物語。

「わたしたち手で話します」

フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク // 作 フェレーナ・バルハウス // 絵 茜書房 Eバ

耳の不自由なリーザに、子どもたちが声をかけてきた。でも、リーザにはわからない。そこへ男の子が現れ、手話で伝えてくれた…。わかりやすい絵と文章によって、耳が不自由な人の世界を教えてくれる絵本

「耳なし芳一」

ラフカディオ・ハーン // 編著 宮脇 紀雄 // 絵 ポプラ社 933ハS J

「怪談 小泉八雲のこわ〜い話 1」

小泉 八雲 // 原作 高村 忠範 // 絵・文 汐文社 933ハ

目の見えない琵琶法師の芳一が、毎晩頼まれて平家物語を語った相手は、滅んだ平家の亡霊たち……。和尚は芳一を案じ、体中に経文を書いたのですが、うっかり耳に書くのを忘れたために……。

「うわさごと」

梅田 俊作 // 文・絵 文研出版 Eウ

広島からの転校生ケンゴ。彼の親は原爆で亡くなっただけ。まわりのみんなは、「ゲンシ病はうつる」って言っているけど、本当だろうか。うわさから生まれる差別について考える1冊です。

「山のいのち」

立松 和平 // 作 伊勢 英子 // 絵 ポプラ社 EI

無口で学校も休みがちな静は、祖父の家で夏休みを過ごすことになります。ある日、飼っていたニワトリを殺したイタチを捕まえた祖父は、静の前でイタチを殺し、自分たちが食べる魚を捕るための道具を作りはじめます。第37回の課題図書です。

「いつか帰りたいぼくのふるさと 福島第一原発20キロ圏内から来たねこ」

大塚 敦子 // 写真・文 小学館 645オ

福島県大熊町で生まれ育った猫のキティ。東日本大震災で家族とはぐれ、ボランティアの人に引き取られます。ようやく家族と再会したものの、故郷にはまだ戻ることができません。原発事故で避難している人々の現実が知ることができる1冊です

「エルマーのぼうけん」 ルース・スタイルス・ガネット // 作

ルース・クリスマン・ガネット // 絵 わたなべ しげお // 訳 福音館書店 933ガ

ある冷たい雨の日に、年をとったネコに会ったエルマー。彼はそのネコから、どうぶつ島にとらえられているかわいそうなりゅうの子の話を聞きます。勇敢なエルマーはりゅうの子を救うため、旅にでかけることに。

「はりねずみのルーチカ」 かの ゆうこ // 作 北見 葉胡 // 絵 講談社 913カ

フェリエの国には、はりねずみのルーチカをはじめ、もぐらのソル、てんとうむしのニコなど、たくさんの不思議な生き物たちが住んでいます。ある日、ルーチカとソルは森へ出かけるのですが……。

「夕ごはんまでの五分間」

プロハースコヴァー // 作 ポコルニー // 絵 平野 卿子 // 訳 偕成社 943プ

夕ご飯ができるまでの待ち遠しい5分間で何かお話が聞きたい、それもお父さんとお母さんの出会い、お父さん・お母さんと自分との出会いについて聞きたいとせがむバベタ。そこでお父さんは、5分間で終わるよう、「本当に大切なこと」だけを話しはじめた。“家族である” “親である”ということについて、また私たちが“当たり前”と思っていることの新しい考え方について、様々を提示してくれる5分間の物語。

「アルプスの少女」 スピリ // 作 講談社ほか 943ス

ハイジはスイスの高山で祖父（アルム）と一緒に生活している。ハイジは友人ペーターと一緒に、山での生活を送る。その後ハイジは、病気のため立つことができないクララのために都市へ行くのですが……。

「星の王子さま」 サン・テグジュペリ // 作 岩波書店ほか 953サ

サハラ砂漠に不時着した「ぼく」。翌日1人の少年と出会い、話すうちに「ぼく」が小惑星から来た王子であることを知ります。その後キツネやヘビなどに会うのですが、別れ際に、王子は「大切なものは、目に見えない」という「秘密」をキツネから教えられ……。

「オレンジソース」 魚住 直子 // 著 西田 多希 // 絵 佼成出版社 913ウ

みさきのクラスの松本さんは、オレンジソースってあだ名のクラスのきらわれ者。でも、あるとき、みさきは松本さんの家であそぶことになって、松本さんが、みんなに誤解されていることに気がつく。でも、クラスの中では、松本さんに声をかける勇気がなくて…。

「わらうきいろオニ」

梨屋アリエ // 作 講談社 913ナ

きいろオニはひとりぼっちだったので、にんげんの子どもを通う学校に行ってみました。きいろオニがお手玉をしてみると、こどもたちがよってきましたが、「きいろオニなんてヘンなの」と言われてしまいます。きいろオニはいっしょうけんめいみんなに気に入られるために、つらいことやイヤなことをさせられても、楽しそうにわらっていました。するとだんだんおなかが重くなってきて…。☆ほんとうの自分を好きになれる本です。

「おかし」 なかがわ りえこ // 文 やまわき ゆりこ // 絵 福音館書店 596ナ

おかしが大好きな男の子・なおきくんは小学3年生。食べるのも、考えるのも、作るのだから楽しみです。

おかしには、魔法のような「ちから」がたくさんあります。

勉強やお手伝いにやる気がでるし、しあわせな気持ちにしてくれる。たとえケンカをしたとしても、仲直りだってできちゃう……。

おかしの役目、いろいろなパワーを紹介します。

☆『ぐりとぐら』でおなじみのコンビで書かれた作品です。

「ひまわりのおか」

ひまわりをうえた八人のお母さんと葉方 丹 // 文 松成 真理子 // 絵 岩崎書店 Eマ

2011年3月11日、津波が宮城県の小学校を襲い、子ども74人と先生10人の命を奪いました。わが子をなくしたお母さんたちは、子どもたちが避難しようとした場所へ、ひまわりを植え始めた。ひまわりの成長に重なるのは、亡くなったわが子……

お母さんたちのわが子へあてた手紙やお話をもとにした絵本。

「あたらしい子がきて」

岩瀬成子 // 作 上路ナオ子 // 絵 岩崎書店 913イ

みきとるいの姉妹のもとに、けんという赤ちゃんがやってきます。赤ちゃんがやってくると、お父さん、お母さん、おばあちゃん、みんながけんの事ばかり。“あたらしい子”ではないみきとるいは、なんとなく居場所がありません。

ある日みきとるいは公園で、おじさんと知的障害のあるおばさんの姉弟に出会います。この姉弟との出会い、また、おばあちゃんと、おばあちゃんの姉であり、手に障害をもつ大おばあちゃんの姉妹。2組の“きょうだい”を通して成長し、徐々に弟のけんを受け入れていきます。

「いつでも会える」

菊田 まりこ // 作 学習研究社 Eキ

ぼくはシロ。大好きなみきちゃんの犬。

突然みきちゃんが亡くなってしまいます。会いたくて会いたくて悲しむシロですが、「目をつむると、みきちゃんのことを考えると、いつでも会える」という犬の目線から書かれた感動の絵本です。

「りんごの花がさいていた」

森山 京 // 作 篠崎 三朗 // 絵 講談社 913モ

小さな家に住むおばあさんが死んでしまいました。悲しい知らせを聞いて息子のサブロは大急ぎで戻ってきます。サブロはかあさんのかたみとして木のいすをもらいます。

すれ違う人たちにはやしたてられながらも、サブロはいすを背負って工場にもどりますが、工場から追い出されてしまいます。歩き疲れたサブロはいすにもたれかかって木の下で眠ってしまいます。そこで一人の娘さんと出会います。サブロは娘さんの家で働くことになり、りんごの花が咲くころ娘さんと結婚しました。

いすは「かあさんのいす」と呼ばれるようになりました。

そのいすのあるところ、かあさんもいっしょです。

そのいすのあるところ、ぬくもりがうまれます。

かなしみはよろこびに、くるしみはやすらぎに。

そのいすがあるところ、しあわせはにげません。

「さみしかった本」

ケイト・バーンハイマー // 文 クリス・シーバン // 絵 岩崎書店 Eシ

図書館に入った ある新しい本。最初はたくさん子どもたちに借りられ、予約で順番待ちになるほどでした。そのうち本は あちこち傷みだし、しばらくすると本棚から動くことはなくなりました。ところがある日、小さな女の子がこの本を見つけ何度も繰り返し読んでくれたのです。こんなに大事にされて、本はとてもしあわせでした。

「ぼくとあいつのラストラン」

佐々木ひとみ // 作 スカイエマ // 絵 ポプラ社 913サ

大好きなジイちゃんのお葬式の日。ぼくのまえにあらわれたあいつはニヤニヤわらってこういった。「おい、走ろうぜ」…。大切な人との永遠の別れが優しく描かれています。～凝縮した時間の中に伝えたいことがたくさん詰め込まれている1冊です～

「またおいで」

もりやま みやこ // 作 いしい つとむ // 絵 あかね書房 913モ

お父さんを待つウサギの子に出会った、キツネの子。目に涙をいっぱいにつめたウサギの子を励ましたくて、キツネの子はあることを提案しますが...

★手を洗う時にも大事なハンカチを使わなかったキツネの子ですが、泣いているウサギの子のためにハンカチを貸してしまいます。

小さな出会いを描く、あたたかなお話です。

「木いちごの王さま」

サカリアス・トペリウス // 原作 岸田衿子 // 文 山脇百合子 // 絵 集英社 949ト

主人公のテッサとアイナは、木いちごを洗っていると、虫がついている木いちごを見つめます。お姉さんや弟は「はらい落として!」「ふみつぶしちゃえ!」と言いますが、テッサは、葉っぱの上へのせ、すずめに食べられないようにやぶの中にかくしてあげました。

お昼ご飯の後、テッサとアイナはかごを持って、森の奥へ奥へとすすんで行くと大きな木いちごのしげみをみつけました。その木は見たこともない、大きな木いちごの実をたくさんつけていました。この後二人は家に帰ろうとしますが迷子になり不思議な体験をします。

★やさしい心や小さな命の大切さ思いやりを感じる物語です。

「ルリユールおじさん」

いせ ひでこ // 作 理論社 Eイ

ルリユール、という職業を知っていますか？

400年ほど前のフランスで登場した、劣化した書物を綴じなおしたり、仮綴じの本を装丁したりする人のことです。

ソフィーという女の子が、こわれてしまった大事な図鑑を直してもらえる人を探しているうちに、“ルリユールおじさん”のことを教えてもらいます。

やっとルリユールおじさんを見つけたソフィーは、おじさんの仕事をみながらいろいろな話をします。おじさんは本を直しながら、自分にこの仕事を教えてくれた父親のことを思い出していきます。何日かたって出来上がった本は、素晴らしいソフィーだけのオリジナルのものになっていました。

ちょっとかみ合わない二人の話にクスツときたり、おじさんの人生に思いをはせてみたり、とても味わい深い絵本です。

「L i f e」 くすのきしげのり // 作 松本 春野 // 絵 瑞雲舎 Eマ

ある小さな町に『L i f e (ライフ)』というお店がありました。店員がいないそのお店では、欲しいものを見つけたら かわりに自分のものを置いていきます。

寒い冬の日、おばあさんは、亡くなったおじいさんが育てた花の種を置いていきました。次にやってきた男の子が、その花の種を見つけると・・・。

お店の品物を巡って、お客さんの様々な人生が見えてくる、優しい気持ちになれる1冊です。

「目の見えない子ねこ、どろっぴ」 沢田 俊子 // 文 講談社 913サ

つぐみの家に迷い込んできた子ねこは、病気で目がつぶれかかっていた。子ねこを助けるためには、手術で目玉をとらなければなりません。しかし、つぐみの家にはすでに3匹の猫がいて…。

自分の意見を言えなかったつぐみが、子ねこから勇気をもらい、成長してゆく姿が描かれています。

「森のプレゼント」

ローラ・インガルス・ワイルダー // 作 安野光雅 // 絵 朝日出版社 933ワ

クリスマスが近づきました。ローラの家は、雪の壁でかこまれました。お父さんは、クリスマスプレゼントを大きな板をけずって作りはじめました。お母さんへの飾り棚を作っているのです。……………森の中の小さな家、家族に心のこもったプレゼントを贈るクリスマス。アメリカ西部にある大きな森の小さな家の心温まる物語に、安野光雅さんの素敵な絵が描かれた一冊です。

物がたくさんある今の暮らしの中で、何が大切なのか、考えることができます。